

ナのはな通信

No.27 2017.2



誰もがかけがえのない存在、自由に差別なく生きる権利がある

「全ての人がかけがえのない存在であって自由に差別のなく生きる権利がある。全ての患者さんは現在もこれからも安全で安心に医療を受ける権利がある。三年間この学校で学んだ平和と医療の結びつきがどれほど重要なことであるかを念頭に置き患者の思いや願いに寄り添い、一人一人にしっかりと向き合いながら患者さんの回復を応援できる看護師になりたい。」卒論発表で述べられた3年生のレポートの一部です。

三年間の学びの集大成であるこの機会は学生の大きな成長を実感する時でもあります、こういった学生の学びを支えているのは、民主的で経験豊かな多くの教育実践者の方々の惜しみな

い応援や民医連の事業所が地域住民の皆さんと共に歩んだ医療活動の歴史と実践が学生たちに豊かなフィールドとして提供され、教育力として学生の成長に大きな役割を果たしているからであることを痛感します。まさに本校の財産です。心から感謝申し上げます。

2016年5月に東葛病院が新築移転し、学校の環境も様変わりしましたが、新しく加わった5名の教職員と共に、これからも学生と共に歩み続けたいと思います。



校長 窪倉 みさ江

学校行事

第22回 体育祭

「騒げ！ 60兆個の細胞！」

5月27日に、当校初の会場となる流山のキックマンアリーナにて、体育祭が行われました。

体育祭では、「騒げ！ 60兆個の細胞！」をスローガンに、一つひとつの競技に全力を注ぐ学生の姿が印象的でした。今年はバレーボール、ドッジボール、借り物競争を行いました。競技に取

り組むクラスメイトの姿に一喜一憂したり、他学年との交流も盛んに行われており、当日のアリーナ会場は声援で溢れかえりました。それに加え、幼稚園児やディズニーのキャラクターの仮装、クラス全体でお揃いのクラスTシャツを制作したりと、アリーナ会場をより一層賑やかに

していました。

3年生はクラス一丸となり、ペットボトルを用いた応援で一致団結し、他学年を圧倒し優勝しました！

また、安全を第一に考えた競技と、ボディメカニクスを駆使したことで、大きな怪我人は1人も出ず、安全に行うことができました。

日頃のストレス発散にもなり、より活動と休息のメリハリつけられたように感じます。2年生3年生は実習中でしたが、ほとんどの学生が積極的に参加し、笑顔溢れる、非常に楽しい時間となりました。

21期生 実行委員長 中村佳奈



第22回 東葛祭

共に学ぶ平和と医療～1人1人を守る私たちの看護～

2016年9月23日・24日に東葛祭を行いました。今回のテーマは『共に学ぶ平和と医療～1人1人を守る私たちの看護～』でした。今回のテーマを考えるにあたって、『このような看護をしていきたい。こんなことを学びたい。』ということを中心に学生同士で話し合いました。その中で、平和でないと医療は行えず、人々の健康も守っていけないという意見が出て、全員がその意見に共感し、だからこそ平和をもっと学びたいということになりました。また、「一人一人を守っていく看護師になりたい」という思いから今回のテーマが決まりました。

1日目は学びの発表を行いました。1年生は、基礎看護技術の移動・運動の授業から運動負荷実験を題材に体内の恒常性について学んだことを劇にして発表を行いました。2年生は生命活動の免疫グループの発表を劇を交えて行いました。自分達が学んだことを劇で伝えることが



21期生生命活動 免疫

できる発表となり、分かりやすい発表を行うことが出来ました。3年生は在宅実習で受け持たせて頂いたALSの方の実践報告を行いました。20年間、在宅で療養を続けている患者さんの生活や思いなどを実際に実習中に撮影したビデオも流し発表。「孫に長靴を買ってあげたい」「クッションを買いたい」という願いをかなえようと外出を行いました。外出するにあたって、安全に行くことができるように吸引時の対応など計画し、当日は問題なく外出できて、患者さんの笑顔もたくさんみることが出来ました。

午後は、認定NPO法人自立生活サポートセンター・もやい理事長、大西連さんを講師に迎え「すぐそばにある貧困～社会の実態から貧困問題を考える～」というテーマで講演していただきました。貧困というものが自分たちのすぐ近くにあるということを改めて感じる事が出来ました。また、日本だけでなく世



大西さん講演全景



選挙に行こう

界と比べてみると所得に対しての貧困率が高くても、税金を払い公共サービスを受けた後の貧困率は低くなる国が多いけど日本だけ貧困率は変わらず高いことを知りました。世界と比べてみると今まで気にしなかったことが多くあり多くの学びを得ることが出来ました。

2日目は地域の方々にも楽しんでいただける催し物を行いました。玄関前には今年話題になったポケモンGOをモチーフとしたアーチの設置を行い、食事処、フリーマーケット、子ども縁日、お化け屋敷、リラクゼーション、野田一民氏絵画展、小林功氏写真展、レモンカンパニーとの共同出店の平和ゼミナールによるカフェと活動報告を行いました。各学年で協力して自分たち自身も楽しく、多くの来場された方々にも楽しんでいただける東葛祭となりました。

第22回東葛祭実行委員長
飛岡萌



22期生運動負荷実験

学生と 共に歩んだ一年

1年生

22期生

担任

戸澤 亜矢 高橋 里美

生田 知歩 富田 智恵



ナーシング

私たちは、2016年4月看護師になるという決意とともに東葛看護専門学校に入学し、6人の地域の方からお聞きしたそれぞれの生活史を“ありのまま”にクラスの仲間たちに伝え、学びを共有する交流研修を行いました。戦時下を生き抜いたA氏は、「国のために命を捧げることが当たり前のように教えられていた」と話し、私たちに「争いあ

うことよりも助け合いが大切、軍事よりも医療・教育を大事にしてほしい」というメッセージをくださいました。現在私たちは何不自由なく暮らしていますが、A氏の話聞いて戦時中の生活・教育の影響を改めて考え、2度と繰り返してはならないと思いました。グループでレポートにまとめる段階になり、初めは一人でやったほうが楽と

思っていました。しかし同じ話を聞いていても捉え方が1人1人違うことに気づき、自分一人の見方だけでなく、ほかの人の考えも知り、広い視野で見ることの大切さを学びました。そして交流研修を通し、看護学生として、仲間と協力・連携していく大切さを知ることが出来ました。

5月の車いすウォッチングで



交流研修カレー作り



車いすウォッチング

は、各グループに分かれて公共交通機関や公共施設を利用し、車いす利用者の“自由に移動する権利”が保障されているのかを体験しました。普段私たちが何気なく行っている行動が車いす利用者にとっては大変なことだと分かり、まだまだ自由に移動することが保障されていないと感じました。誰もが平等に生活していくためには、バリアフリーが進み安心して外出できるような環境にならなければ住みやすい社会とは言えないと思います。普段私たちが生活しているだけでは気付かなかった“自由に移動する権利”を乗る人と介助者の視点になって考えることが大切だと学びました。

基礎1-2実習は患者さんの健康回復や、医療・看護にどのような願いや要求があるのかを知り、それを応援する看護実践を学ぶという目的で臨みました。ある学生は肝硬変と糖尿病から食事制限のあるB氏を受け持ちました。B氏は肝性脳症による意識障害で三回目の入院でした。B氏の願いは「早く家に帰って孫と旅行に行きたい。みんなでワイワイとした楽しい時間を過ごしたい。」というものでした。B氏は食べることが好きで「牛乳が飲みたい、パンが食べたい。」と毎日訴えていました。肝性脳症になると、牛乳さえも飲めないのかと思い、調べたところタンパク質摂取によって、アンモニアが発生し肝硬変により解毒機能が低下し、アンモニア

が代謝されず体内に蓄積されてしまうため、牛乳の摂取が制限されていると知りました。患者さんにとって食事治療の一つだと学び患者さんの食べたいという気持ちを応援できないかとグループで話し合い、実習最終日にはほかのペアの患者さんも含めてデイルームで食事会を開きました。初めは「牛乳が飲みたい、パンが食べたい。」という願いに牛乳を飲んでもらうことでしか患者さんは満足しないと思っていました。しかし食事をする場を飾ったり、会話を楽しむことで「楽しい時間を過ごせた。」と食事を楽しんでもらうことも看護であると気付きました。

実習後は、それぞれ一人の患者さんからの学びで終わるのではなく、ゼミナールをすることで患者さんからの学びをクラス全員で共有しました。自分たちの実践を振り返ることで「私たち中心の看護になっていないか。」「本当に患者さんの求めているものなのか。」など意見交換しました。言葉だけでなく、表情

やしぐさ、自分たちの働きかけを通して患者さんの願いを捉える事の大切さを学びました。それらの学びから、患者さんの立場に立った看護とはどういうものなのかを考えるきっかけができ、これからも追求し続けていきたいと思いました。入学当初は、ただ病気の知識や技術を学んで、患者さんの手助けをするのが看護だと思っていました。しかし、この半年間の学びの中で、患者さんがつらさや苦しい思いを抱えながらも「早く良くなって退院したい!」という気持ちで治療に向き合う姿から、強さやたくましさを知りました。そして患者さんの願いを応援したいという気持ちに変わっていききました。この気持ちを大切に、クラス全体で学び続けていきます。

車いすウォッチングでバス乗車体験



清拭演習

学生と 2年生 共に歩んだ一年

21期生

担任

菊池 静華

江島 典子

富田 智恵



体育祭 バレーボールに燃えた

2年生の最初の学習は生命活動から始まりました。生命活動は8つの系、人間誕生・呼吸器・循環器・骨格・免疫・消化器・脳神経・内分泌に分かれてそれぞれ学習を進めていき、ゼミナールで学び合います。東葛祭で発表を行った免疫グループは目に見えないところで外敵と戦って私たちの身体を守る免疫を学びました。その防御は1つではなく、何重ものバリアが用意されており、互いに連携しながら働いています。そして、免疫は免疫としての働きだけでなく、内分泌や脳・神経系の機構も加

わって成り立っています。さらに循環器や消化器との繋がりを知り、それぞれが関係なく働いているのではなく、関連し合って成り立っているのだと学びました。

生命活動での学びを通して、5月下旬から3週間の成人1実習に臨みました。ある学生は細菌性肺炎のため入院した80代のAさんを受け持ちました。Aさんは肺炎を起こしたことによって胸腔に膿が溜まっていました。生命活動の学びを振り返り、細菌を排除するために免



看護技術演習風景

疫機能がはたらいっていることがわかりました。そしてこの学びから、患者さんに必要な応援は何かと考え、新たに感染することを避けるために、口腔ケアを実践しました。最も異物が入りやすい口腔を清潔に保つことで菌の侵入や繁殖を防ぐ効果があります。また、口腔内の機能を維

持し、誤嚥を防ぐことにも繋がります。患者さんが口腔ケアの大切さを理解できるように説明することで、次第に口腔ケアを自ら行ってもらえるようになりました。生命活動を振り返り、身体の中で何が起きているのかを土台にして患者さんの応援に繋げることができました。

夏休み後は約4か月にかけて外科・精神・小児・母性の各論実習に臨みました。

精神実習では、発達遅滞を伴う統合失調症の50代女性のB氏を3クールにわたって受け持ちました。1クール目の病棟では常に不安で「私はなににもできない」と悲観的な発言がみられましたが、2クール目になると、自ら「散歩に行きたい」「料理もやりたい」と発言の変化が見られました。その後、自宅退院し訪問看護で見ていくこととなりました。3クール目は、様々なサービスを利用しながら一人暮らしをしている様子を知り、入浴や

電子レンジの操作などたくさん出来ることがあると知りました。また入院時より表情が穏やかになり笑顔も増えました。はじめ病棟

で受け持ったときは何をすることも自信がなかった様子のB氏でしたが、3クール目には退院となり、訪問看護を利用しながら一人暮らしができるようになるまで回復し、笑顔も増えました。1クールだけでは分からなかった回復の経過を3クールのゼミナールを通し、実感することができました。

小児実習では気管支喘息発作で入院した4歳のD君を受け持ちました。家庭環境が複雑で、D君の母親も小学校の途中までしか通学していませんでした。そのため、文字の読み書きも十分にできずにいたそうです。喘息は薬物療法により順調に快



生命活動 消化器

方へと向かっていきました。ある日D君の前歯がないことに気づき、母親に尋ねると、「ちゃんと歯磨きしていたのに溶けちゃった」と話していました。理由については分からないと言っており虫歯の認識がない様子でした。そのことを看護師に伝えると、食べ物に偏りがあってもD君は食べさせてもらっているから良い方だということ、今まで見てきた子どもの中には食べていない子どもいたということを教えてくれました。食べていない子どももいるという話を聞き、虐待やお金がなくて食べさせることができないのだという現状を学び、子どもの貧困とはどういうことなのかグループで学んでいきました。薬代が高く医療費が払えないこと、母子家庭や若年出産の困難、少々の病気や虫歯では医療にかかれないう方もいるということを知り、「貧困な子がない」というのではなく「いるけど見えていない」ということに気づかされました。子供の貧困は子供の成長に関わり身体的な影響や健康への影響があるのだと分かり、その人がどんな環境で育ってきたのかにも繋がっていくと学びました。



成人1実習 患者さんと食事会

学生と 3年生 共に歩んだ一年

20期生

担任

山本 浩毅

高田 澄子

福井 慶子



研修旅行 アイヌ イコロシアター

《北海道研修旅行》

今年は北海道に行き、アイヌ文化、矢臼別演習場と15年戦争、エネルギー問題、夕張炭鉱の強制労働の実相、TPP問題を学んできました。

1日目は自衛隊の矢臼別演習場に行きました。矢臼別演習場は東京ドーム3600個分の敷地面積を持つ日本最大の演習場です。1964年にパイロットファーム建設計画が変更され、この地に演習場設置が決まり84戸の農家が追い出されました。戦争に加担する軍事演習のために何故住居を変えなければならないのか、違憲であると現在も2戸は離農せず残り続けています。射撃演習は年間約10億

円使われ、米兵による訓練では山火事や誤射もありました。2日目はアイヌ民族の方の話を聞きました。アイヌの人々が守ろうとした古来の風俗や習慣は本来、脅かされることなく当然守られるべき権利であるにも関わらず、当時の日本人は領土略奪に加えて、狩猟の禁止など生活様式を一変させられました。髪型や服装も和人に合わせるように強制させていました。劣った民族だと差別し人権を侵害し続けていた事実を知りました。3日目は農業を営んでいる山川さんからTPPについて話を伺いました。現在、日本の食糧自給率は

39%ですが、TPPに参加し、関税が撤廃されることによって自給率は13%まで下がる危険性があることを知りました。夕張炭鉱では国内の産業を支えるために他国から強制連行し、炭鉱という過酷な労働を強いられていたことを知りました。

4日間の研修を通して現地の人の生の声を聴き、歴史や文

化、日本の実態を学び、二度と同じ過ちを繰り返さないよう、今を生きる私たちが過去にあった事実を知り、伝えることが大切であると学びました。全ての国民には憲法9条、25条により基本的な人権や平和な社会が保障されているにも関わらず、異なる現実でした。今もう一度、医療従事者になる上で人権を全面的



在宅看護論実習



体育祭 優勝したよ！

に抹殺する戦争と平和の意味について考えられた研修旅行になりました。

《卒業研究ゼミナール》

総合実習で受け持ったD氏は肺癌・肝臓癌の末期で入院していました。癌性疼痛コントロールのための麻薬は5mgで約101円と高いお金がかかることが分かりました。しかし、D氏は疼痛コントロールのための麻薬を1回20mg、1日2回使用しても痛みを緩和できていませんでした。D氏はこれから残される母に少しでもお金を残したいという思いを持っており、積極的な治療は希望せず、緩和ケアを中心に行なっていく方針となりました。疼痛コントロールをすることで生きられる期間を延ばすことができるという報告もあり、まるでいのちがお金で左右されるという実態があると分かりました。そこで、日本は安心して医療を受けることができるのか疑問に思い、日本の社会保障の実態について調べました。

現在の医療保険制度は、保険料を払えない人に対して資格証明書や短期保険証という制裁を加え、事実上無保険の人を生みだし、さらにお金がないことで医療にかかれない人が手遅れで死亡している事例が何件もあることを知りました。また、公的医療給付費も年間8兆円もの削減を政府は掲げ、「川上から川下へ」の政策を次々と実施していると分かりました。そもそも、社会保障は憲法第25条「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と基本的な人権を保障するためにつくられたものです。しかし「生きる」ことを保障する医療が改悪されることで、その権利が脅かされるということを学ぶことができました。私たちは卒業研究を通して、患者さんのいのちがお金で差別されず、誰もが平等

に医療を受けられるよう、また安心して生きていけるような社会をつくっていかねばならないと感じました。そのためには過去から現在までの社会情勢を含めた歴史を学んでいくことが必要であるとも思いました。その上で社会保障が充実していけるような運動に積極的に参加し、患者さんの権利を主張していきたいです。私たちは、これから医療者としてたつこととなりますが、その運動の主体者として、1人の医療者としても問題意識をもち人々の人権やいのちを守っていかねばならないと思います。



在宅看護論実習 患者さんとショッピング

平和ゼミナール

原水爆禁止2016世界大会長崎



原水爆禁止世界大会集会



平和祈念館にある
地球平和監視時計

私達は8月4日から6日に行われた原水爆禁止世界大会に参加しました。

一日目は、世界大会開会総会に参加しました。総会には各国からの代表の方が来ていました。世界では、核実験が行われており、北朝鮮では、2006年、2009年、2013年と2016年の1月に4回の核実験が行われました。絶対に核兵器はどの国もあってはならないということを話されていました。このことは世界のだれもが願っていて、この総会で話された沢山の反対意見が核兵器を持っている国に届き、世界中から核がなくなればいいと思いました。二日目は、分科会で碑めぐりに参加し、最初に原爆ドームを訪れました。当時原爆ドームは、広島県産業奨励館という名称でした。その日は勤務していた人が200人おり、原爆が落とされた8時15分館内にいたほとんどの人が亡くなり、原爆ドームは骨組みだけを残す、

今の無残な姿になりました。生活の中でいきなり原爆が落とされ、一瞬のうちに大切なものをすべて奪い去ってしまったのだと考えると原爆は本当に恐ろしいものだ改めて感じました。次に平和公園を訪れました。公園の中には、平和の鐘、原爆の子の像、祈りの泉、平和記念資料館、慰霊碑などがあり語りべの方の話を聞きながらゆっくりとめぐりました。そして平和の鐘、原爆の子の像を鳴らしま

した。原爆の子の像では千羽鶴の鐘がつるされ、その下には金色の鶴がつるされ、風鈴式になっていました。この像は原爆で多くの子供たちの霊を慰め世界に平和を呼びかける目的で作られたものです。鐘を鳴らしているとき、私たちはこの原爆で多くの子供たちが亡くなっていることを改めて知り、とても悲しい気持ちになったのを今も覚えています。平和の鐘は祈りという意味もあり子供たちの祈り



原水禁 2016 に参加したメンバー

のようなせつなくも、きれいに
すんだ音にも聞こえました。た
くさんの水が噴き出す祈りの泉
は「水をくれ、水をくれ」と言
いながら、息絶えた原爆犠牲者
を慰めるため、今も噴水から大
量の水が絶え間なく噴き出して
いるそうです。私はこの噴水が
原爆で亡くなった方たちに届
くといいなと心から思いました。
原爆死没者慰霊碑の間からは
原爆ドームを見ることができます。
また、水を求めてやまな
かった犠牲者を慰め、核兵器廃
絶と世界恒久平和を希求する目
的で建てられた平和の灯では、
1964年8月1日に点火され
て以降ずっと火が燃え続けてい
ます。この火は「核兵器が地球
上から姿を消す日まで燃やし続
けよう」という反核悲願の象徴
となっています。

太陽が照り付ける中、アオギ
リの木の下で被爆者の方がお話
をしてくださいました。その方は車
いすに乗っていました。「原爆
で亡くなった方がそこらじゅう
にいて、生きている人は家に帰
るために亡くなっている人を踏
んでいた。」そんな悲惨な話を

聞き、当時、みんなそれだけ生
きることに必死だったのだと胸
が痛くなりました。また、「ア
オギリの木にある傷は原爆の爪
痕でもあるが、今まで生き延び
た奇跡の木でもあるんだよ。被
爆者はいつ病気になるかもわか
らないで今を生きていて、皆ア
オギリの木を見て頑張っている
という勇気を与える木
なんだ。」と教えてくださり、
いつ自分が被爆の影響で発病す
るかわからないという不安を抱
えながら生きていくことの苦し
さや被爆者の方々の強さを感じ
ました。

三日目は、広島市平和記念式
典に参加しました。原爆が落と
された8時15分に、黙祷を行
いました。現地で初めて黙祷を
して、この三日間を振り返り、
71年前の出来事を想像する
と、とてもやりきれなく悲しい
気持ちになりました。

世界大会閉会総会に参加し
て、世の中から核兵器は廃絶さ
れるべきだと改めて感じまし
た。これからも、平和の灯を絶
やさず、ここで学んだことを友
人や家族に話し、これからも平
和について考えていきたいで
す。



平和祈念館



平和都市記念碑



原爆ドーム

19期自治会活動紹介

私達東葛看護専門学校学生は、患者さんの願いを実現するために必要なことを日々追及しています。そのためにも、3年間の学びの3分の1を占める臨床実習では患者さんをありのままに捉え、その人が今までどのような生活・人生を送り、今何を望んでいるのかを考えた看護実践や、2年次には健康な人間の生命活動を作り出す身体のおしくみと働きを生命誕生と進化の過程を踏まえて、患者さんの病態を科学的に理解することの基盤として生命活動を学びます。さらに、患者さんの置かれた状況・健康を脅かす原因を知るにはその人の生活や労働実態の理解なしには得られません。そのためには労働実態や戦争について知るために2年次の後半には地域フィールドに参加します。

自治会は、生徒ひとりひとりが看護師を志す上で、この学校での大切な学びを主体的に深めることができる「学生が主人公の学校」を目指す活動をして

いきたいと思っています。学生の要求を真摯に受けとめ、学校全体で解決に向かっていきます。時には学校行事に全力で打ち込み仲間と交流・協調する時間を応援する自治会でありたいと思っています。

また、今期の自治会の活動方針のひとつに、「命を守る看護師を目指すものとして、人権を守るという視点に立ち、世界の動きや政治に関心を持ち学習を積極的に深めた上で学生が主体となって声を挙げ発信していく」と決めました。患者さんの命を守るために、その人が人間らしく生きるとはどういうことなのかを授業・実習を通して学びました。

安倍政権の下で国の社会保障費は基地や兵器など軍事費のために削減されていることを私達国民は知らされていません。こうした見えない恐怖と隣り合わせの日常と同時に、格差や貧困も拡大していくばかりです。働いても働いても生活困窮に陥っ

てしまう(ワーキングプア)労働者が全体で24%を占め、この2年間で49万人も増加しています。また、正規雇用者は年々減少し、現在は非正規雇用者が全体の4割を占めており、その人たちの働かされ方もとても酷い物ばかりです。我が校の学生の中にも日々アルバイトに追われて学業に専念できないという実態もあり、自治会は学生のアルバイトの労働実態について焦点を当てました。労働時間もまともに守られず、学生の中には日々正規雇用者と同様の作業密度・責任を背負いながら学ぶ権利が保障されていない働き方を強制される実態があることを知りました。

こうした貧困の実態や働き方にも目を向け、自分たちが何をすべきなのかを考えられるように、貪欲に学んでいき、学校全体への発信、さらには学校外での活動に積極的に参加していけるような自治会にしていきたいです。

自治会役員



ようこそ先輩

私が本校を卒業し看護師として働き始めてから、今年の4月で10年目になろうとしています。看護師として働いたこの10年を振り返ってみると、本校で学んだ「すべては患者さんから出発する」「患者さんをまるごと捉える」がいつも心の中にあり、私の今の看護の原点であり、礎となっています。

臨床指導者、主任となり日々忙しい中でも、まずは患者さんの傍に行くこと、そして顔を見て、触れて、「どうですか？」と声をかけています。患者さんは言葉だけでなく、表情や動作といった形で応えてくれ、そこから患者さんとの関わりや繋がりが始まり、それは「いつもと様子が違うかな？」といった観察や「こんな思いを抱えている」「実はこんなことも出来るんだ」といった患者さんの一面を捉えること出来て、それは看護へと繋げることが出来ます。

また、臨床指導者として関わる中で、改めて「東葛看護学の学生は本当に患者さんをよく捉えることができています」と強く実感しています。私たち現場では気づくことが出来なかった、学生だからこそ引き出した患者さんの思いや新たな一面、可能性を知ることが出来、学生も病棟チームの一員として、ともに「患者さんのために」歩む看護を行うことが出来ていると感じます。

東葛看護学で学んだことの全てが「学びの財産」となり、過ごした日々はかけがえのない宝物となります。これから一瞬一瞬を大切に過ごしてほしいと思います。

学生の皆さんと現場と一緒に「患者さんのために」看護できる日を楽しみに待っています。



1科11期生 笹原 利晃

今となれば、東葛看護学での3年間は「いろいろな事を学ばせてもらったな」と思います。学生時代は、何のために生命誕生からビックバンから何？田んぼに林、果樹園、地域フィールドと直接看護に関係あるとは思えない授業がたくさんありました。苦労は多かったけれど、今は意味があることだと実感しています。生命誕生の成り立ちを学ぶ事は民医連の命は平等であることの基本に繋がっています。どんな命も大切である、だから患者の病気だけを見るのではなく、患者の背景にあるもの・暮らしを含めて丸ごとみることが看護には求められていることを知るための基礎だったと実感しています。

そして、この授業のほとんどがグループワークであったことの意味も痛いほど、今感じています。患者の療養生活を援助するには、多職種とのチーム連携が欠かせません。一人の患者をみるには、チームの仲間と協力し、協調し、自分の考えを声に出すことも求められます。授業で日々繰り返される、グループワークが今、地域包括連携室で色んな調整をする私の力になっています。

卒業してしまうと、楽しい思い出ばかりです。その時は大変だと思っても、あとできっと良い思い出・糧となります。みんな楽しく学びを深められる学校だと思います。将来、キラっとした看護師さん目指して頑張ってください。



2科11期生 徳重 節子

新任職員挨拶



看護教員 高橋 里美

医療生協さいたま生活協同組合の埼玉協同病院より、4月から着任しました。出身は熊本県で、島根県の看護学校で学び、看護師として手術室と産婦人科で働き、それから助産師学校に行きました。以来ずっと助産師をしていましたので看護の世界でも知らないことがたくさんあります。ですから、学生の皆さんと一緒に学んでいきたいと思っています。



看護教員 戸澤 亜矢

私自身も東葛看護学校の卒業生です。「学ぶことの楽しさ」を実感できた母校に、教員として戻ってこられた喜びを日々感じています。臨床現場では「患者さんから学ぶ」ことを大切に、仲間と共に看護実践をしてきました。これまでの経験を活かし、学生の皆さんと一緒に学び、看護の楽しさや喜びを感じてもらえるように頑張りたいと思います。



看護教員 富田 智恵

私はこの学校を1科3期生で卒業し臨床で働いてきました。臨床で学生を受け入れていた時には知らなかった学生の辛さ、教員の苦労を今、身に染みて感じています。生命活動や各論実習など、私もまた1から学ばせていただき、社会保障や平和問題なども学生とともに学んでいます。日々学生に元気をもらいながら、一生懸命頑張っていきたいと思っています。



事務職員 松下 理恵

昨年12月に異動してきました。看護学校には約7年前に図書室の司書として1年ほどお世話になっていました。その後病院の図書室司書、医局事務を経て戻ってきました。久しぶりの看護学校は、教員の先生方の変わらない温かさにホッとしています。これから学生の皆さんの学校生活のお手伝いをしていきますのでよろしくお願いします。



事務長 児玉 宏行

2016年7月に事務長として就任し、はや約半年が経ちました。まだ分からないことが多く不慣れなところもありますが、まわりの方々に助けられながら日々の仕事に取り組んでいます。みなさんとの出会いを大切に、共に学び、共に成長し、みなさんの学生生活が充実したものになるように全力でサポートしたいと思っています。

若者が生きる社会背景と スマホ・ネットをどのようにとらえるか

副校長 山田かおる

東葛看護学校では、年に8回の臨床指導者会議と夏季指導者研修会を開催しています。今年度の夏季指導者研修会は、「基本的人権擁護の立場に立つ医療・看護を学び合う～健康権を保障する医療・看護、教育について考える～」をテーマに7月27日に開催しました。学習講座として横浜市立大学名誉教授中西新太郎先生をお招きしました。その内容を要約してお伝えします。

1. 若者のライフコースも意識も大きく変わってきた

大学を出て3年後の離職率はどうなっているか。厚生労働省

2012年の調査結果によると最も高い業種は宿泊業・サービス業で53.2%で、半数以上がやめていることになります。医療・福祉職38.0% 4割に近い数字です。こういう状態になったのは1997～98年頃からです。職場環境が急激に変化して、追いつけられずに仕事をせざるを得ない状態になったのです。「ずっと働きたい」と考えている新人社員は8割以上と多数派ですが、現実はそのほかになくなってきているわけです。

中学生に「将来、どんな仕事につきたいか」と聞くと、トップは「希望なし・わからない」です。

できることなら仕事なんか就かずにいきていきたいという生徒が多くなっていて、これはさらに増えていくだろうと思います。将来、こんな仕事につきたいという希望を持ちにくい社会になっているということです。

2. 若者が社会に出ること、社会をつくることの難しさ

1997年頃から、若い人たちが社会に出ていくこと、社会をつくるのが難しくなっていました。就職が難しくなるにつれ、「就活」が異常なまでに大変な活動になってきました。自己分析は応募のたびにやりますが、落ちるたびに自分が否定されたように感じ、精神的に追い詰められる人が出てきました。ある意味、異常な就活が行われ、そこをくぐり抜けないと社会に出ていけない。そして、就職先では、一人の人間として扱われないようなことが当たり前に行われる。

ある小児科医が「自尊心」の調査を行っています。それによると、成長するにつれ自尊心(自己肯定感)が低くなっていくという結果が出ています。学校という社会の中で自分を肯定し、安心していられるという状態は小4ぐらいからどんどん失われて



って、高校生になると、自分に自信が持てない人が6割以上になっている。ユネスコの調査報告の中でも、「日本の子どもは世界一孤独である」と指摘されています。学校生活のなかで自尊心が失われていく、自分を肯定できない生徒が増えていくというのが、日本の社会の大きな特徴です。

3. あなたはあなたでいい

みんなと一緒にいて、自分を出ことができ、気楽でいられるような世界はどうやってできるのでしょうか。悩みや困難のない職場をめざすというのは間違いだと思いのです。悩みや困難をなくすのではなく、見えやすくする。見えやすい職場をどうやってつくっていくかと考えた方がいい。また、職場では、どうしても「使える・使えない」「できる・できない」というモノサシが出てきます。「できる・できない」だけが支配する職場になると、荒廃します。「マイナスのメガネ」をかけてものを見ると、できないことの連鎖が出てきます。そうではなく、できない

人、つかえない人もいて、その人たちも全部含めて力が発揮できるような集まりはどういう集まりなんだろうと考え

た方がいいと思います。

コミュニケーションというのは相手がいないと成り立ちません。互いに出会いやすく、つながりやすい場所、機会、状況を私は「コンタクトゾーン」と呼んでいます。そういう場所をどうやってつくるか。自分が安心で

きる、他の人も安心できる、そういうすきまや余地のある安心できる社会を具体的な形でつくっていくことが大切なのです。お互いに智恵を出し合って、足りないところを補い合い、豊かな社会をつくっていききたいものです。



編集後記

「ひろくに 出会えて良かった 可愛いな
これからはずっと 元気でいてね」

文学の授業で、学生が詠んだ短歌です。「ひろくん」とは、2016年夏に急逝された「文学」講師高橋弘先生のことです。高橋先生には、2010年から今年度途中まで7年にわたり、本校の教育活動に御尽力いただきました。「ありのままの自分を

由に表現していいよ。気持ちを自由に言葉にしてください」と話され、毎年学生の短歌集を発行。どの歌も、みずみずしい学生の気持ちが溢れていました。「先生はいつもニコニコして、優しい声を聞くとほっとしてうれしくなる。」と学生たち。先生から学んだ、「ひとりひとりを大事にする」という教育を、これからも追及していきたいと思います。

編集委員 窪倉みさ江／菊池静華



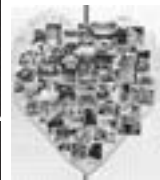
ナースングセレモニー



職員もつられて笑顔に



学ぶ青春



'16.1~'17.2

小林功

モノクロ写真館

入学式



追悼 高橋弘先生



稲刈り



皆で口ずさんだコーラス(上:アカシア会 下:バンブー)

東葛祭



がまだせ! 熊本



講演 大西連さん



墨田 医療相談会



青春のすべては戦争の中



世界に誇る職人技



伝統を守り続けた靴職人



洗髪 おっかなびっくり



平和を学んだ東京大空襲被災資料センター



大工仕事に疲れ果て...



体育祭 思い思いのコスプレで



勤医会東葛看護専門学校

編集・発行 勤医会東葛看護専門学校
〒270-0174 千葉県流山市下花輪 409 TEL.04-7158-9955 FAX.04-7159-7055
発行責任者 校長 窪倉 みさ江